

D 139 摂食障害女性の被服行動について(第2報)

目白学園女子短期大学 ○大枝近子

昭和大藤ヶ丘病院 北村 勉

目的 被服心理学の分野では、被服行動が個人の自己像と深く関係していることが指摘されているが、昨今食の病理として注目を集めている摂食障害の患者もまた、身体心象や心理的な自己像が未発達であると言われている。そこで、摂食障害女性と正常女性の被服行動を比較検討することにより、身体の延長、身体の一部としての被服行動という意味あいにおける身体境界への無意識的な投影としての身体像形成への影響を明らかにした。

方法 現在摂食障害と診断され、医師のもとに通院している女性患者11名と目白学園女子短期大学2年次生44名に対し、1990年7月～8月に質問紙法による調査を実施した。調査内容は、自己の服装イメージ(SD法、20形容詞対、5段階尺度)、母親の服装イメージ(SD法、25形容詞対、5段階尺度)、被服行動(47項目、5段階尺度)等である。なお、ここでの被服行動は、外観・個性の強調・同調・機能性・心理的安定・理論付け・慎み深さ・似合いの良さ・母親の影響の九つの観点から作成される尺度とした。

結果 摂食障害女性は正常女性に比べ、服装と自己の気持ちを切り離して考えており、それは自己像、身体像境界のあいまいさ、脆弱性に通ずるものと解され、衣服といった投影的手法としては、不安に対する防衛力が不十分となっていると考えられる。また、摂食障害女性は、自己の服装イメージを地味で暗く、ドレスシーで大人っぽい保守的な服装であると考えている一方、同様の服装イメージをもつ母親の服装に対しては着たくないと思っており、このことは母親の拒否、母親との葛藤の未処理状態と考えられ、女性性同一性母親からの分離に対してアンビバレントな結果を示している。